谷中信一著『『老子』經典化過程の研究』

中村未來

本書は、『老子』が道家道教の經典として確立するまでの過程を、傳世文獻と出土文獻を用いて解明することを目指した大著である。著者の谷中信一氏は、郭店楚墓竹簡や上海博物館藏戰國楚竹書、北京大學藏西漢竹書などの出土文獻中に含まれる道家系文獻や、『老子』『莊子』『管子』『呂氏春秋』などの傳世文獻に見える老子關連の記述を多角的視點で檢討することにより、從來、不明な點の多く殘されていた『老子』テキストが、現存最古の郭店楚簡『老子』以降、いかに現行本の姿に整えられ、權威附けられていったかを追究している。

本書の構成は次のとおりである。

序
第一章　郭店楚簡『老子』考
第二章　郭店楚簡『太一生水』考
第三章　上博楚簡（七）『凡物流形』考
第四章　上博楚簡（三）『恆先』考
第五章　『莊子』天下篇考
第六章　いわゆる黄帝言考
第七章　『淮南子』道應訓所引『老子』考
第八章　『史記』老子傳に隱された眞實
第九章　北大漢簡『老子』の學術價値―「執一」概念を中心に

終　章

本書第一章～第四章、および第九章では、戰國～漢代の竹簡文獻を研究對象とし、また第五章～第八章では傳世文獻に見える老子關連の記述を中心に檢討している。一九七三年に湖南省長沙市の馬王堆漢墓から帛書『老子』が出土してより、一九九三年には郭店楚簡『老子』、二〇〇九年には北大漢簡『老子』と、近年次々に新たな『老子』テキストが發見され、多くの研究者によって關連論著が發表されてきているが、そのほとんどは個別の文獻を扱った各論にとどまる。その中にあって、傳世文獻を含め體系的に『老子』の形成過程の解明をはかる本書の意義は極めて大きいと言えるだろう。長年『老子』や『管子』、そして齊の稷下の學に目を向け、緻密な研究を續けてきた谷中氏だからこそ爲し得た成果である。

特に、氏が「本書はまさしく新出土資料なくしては生まれ得なかったと斷言できる。それ故本書に收めた論文は、すべて郭店楚簡『老子』出土以後に書いたものである」（二九六～二九七頁）と述べるとおり、本書は郭店楚簡『老子』を軸に据え、それと現行本との相違點に注目して考察が進められている。郭店楚簡『老子』は、竹簡の長さや兩端の形狀の違いから、甲乙丙の三本のテキストより成ると考えられており、その字數の合計は現行本約五千字の半分に滿たない約二千字である。そのため、郭店楚簡『老子』については、從來、それがすでにある程度現行本に近い『老子』テキストから抄錄されたものとする說と、郭店楚簡『老子』を現行本へ至る形成途上のテキストとする說とが竝行して主張されてきた。谷中氏は、『論語』（齊論語・魯論語・古論語）や『晏子春秋』（銀雀山漢墓竹簡本・現行本）にも複數の傳本があったことを根據に後者の立場に立ち（九頁）、郭店楚簡『老子』に「何が書かれていないか」（一一頁）という點、すなわち「道」を言い換えた概念としての「一」が見えず、「水」を柔弱の象徵とする記述も見られない、また宇宙生成論の觀點から萬物の根源として說かれる「道」や、その「道」のはたらきとしての「德」についても語られ

ていないことに着目し、それらの思考が次第に組み込まれていくことによって、現行本『老子』へと整えられていったのだとしている。

また、谷中氏は『老子』の成立や變遷について、「先ず楚地において處世哲學の書として成立し、次いで齊地に運ばれて彼の地で黄老道家の手によって無爲の政治哲學の書として面目を一新し、それもやがて漢代に入ると、黄老思想の衰退と共に、道教という宗教哲學の書として再解釋され、さらに魏晉代に至ると、佛教の傳來に刺激されて無の形而上學を説く哲學書として讀まれることとなった」（序四頁）という自身の考えを提示しているが、これは氏が出土文獻と傳世文獻とを時に柔軟な發想で關連附けて論證する中で導き出した本書における一つの解であろう。

ただし、先述した通り、郭店楚簡『老子』については、抄錄説と形成途上説の二説が並行して行われており、淺野裕一氏「郭店楚簡各篇解題」（『中國研究集刊』、二〇〇三、七～八頁）は「もし三種の『老子』が抄本ではなく、形成途上の過渡的な姿を示すテキストだと假定すれば、三本にはコア（核）になる共通部分が存在していなければならない。（中略）しかるに三本の間には、そうした現象が全く見られない」と主張している。また、澤田多喜男氏『『老子』考索』（汲古書院、二〇〇五、三三七頁）も「これら帛書でいう《道篇》と《德篇》の入り混じったものを原本とみなして、それを整理しなおして帛書乃至は王弼本に近い章序のテキストを再構成したとみるのは、かなり困難ではなかろうか」として、郭店楚簡『老子』を形成途上のテキストとすることに異を唱えていることが分かる。これよりすれば、內容の重複がほぼなく、かつ竹簡の形狀から甲乙丙に分類された郭店楚簡『老子』の三つのテキストを、谷中氏が指摘する齊論語・魯論語・古論語のような複數の『論語』異本と同等に捉えることには、より愼重な態度が求められるのではないかと感ずる。逆にいえば、字句に異同は見られるものの、現行本とおおよそ同一のテキストがほとんど重複することなく、現行本の五分の二の分量であるとは言え存在し

ていたことの意味は重い。郭店楚簡と同様に戰國中晩期の文獻と考えられている清華大學藏戰國竹簡の中には、『詩』や『書』の一篇を組み込んで新たな内容に編纂されたと思われる文獻が見られ（『耆夜』や『周公之琴舞』、『芮良夫毖』など）、その他の古代文獻中にも「故曰」や「古曰」、「諺曰」のように經書や格言・慣習などが斷章取義的に引用されることも廣く見られる。以上を考慮すれば、郭店楚簡『老子』についても、經典とまではいかずとも、すでに格言集として一つ一つの章がある程度定まった形で個別にも使用され、抜き書きされていた可能性は十分に考え得るのではなかろうか。

また谷中氏は、郭店楚簡『老子』丙本と『太一生水』とが竹簡の形狀より同册であったと考えられる點や、その思想内容の近似性から、兩篇をひとまとまりのテキストと見なすべきであると述べている。そうすることによって現行本『老子』の中心思想をなす「一」に關する記述が楚簡『老子』中には見られないことも解消すると考えるのである。しかし、同時に氏は「『老子』經典化の過程で、一統天下の大きな政治目標を掲げる黄老道家思想の形成發展に伴って、「太一」は「一」に言い換えられていき、これに連動して『太一生水』部分は楚簡『老子』丙本から切り離され、丙本部分だけが甲本・乙本とともに今本『老子』に收斂していったと推測できる」（一六五頁）とも論じているが、そうであれば『老子』の「一」の概念と『太一生水』との關連性が曖昧になり、必ずしも『太一生水』の「太（大）一」の概念が『老子』へと引き繼がれたことにはならないように思われる。

出土文獻のみならず、『莊子』天下篇や『列子』などの成立が不確かな傳世文獻をも積極的に用いて、統合的視點から思想内容の相互關係を明らかにしようとする點は、本書が他に資する有益な試みであると考える。ただし、先秦～魏晉に至るまで長期間かけて形成されたとされる『列子』について言えば、谷中氏は武内義雄氏「列子冤詞」（武内義雄全集第六卷、角川書店、一九七八）や小林信明氏『列子』（明治書院、一九六七）、小林勝人氏『列子』（岩波文庫、一九八七）などの評價を引用しつつ、

「ひとまず愼重な資料操作を前提とすれば、本論の考察に使用することは許されるとしてよい」（一五八頁）と見なしているが、その後、特にテキストに關する自身の具體的な見解を示さぬまま、『列子』天瑞篇の記述を取り上げて檢討を進めている（一五八～一六一頁）。ここで氏が引用する『列子』天瑞篇に關しては、福永光司氏『列子1』（平凡社、一九九一、二七七～二七八頁）が「漢代に成立した緯書の論述と密接な關連をも」つことを根據に、「漢代の成立であろう」と指摘している。そのため、少なくとも福永氏の見解に從えば、漢代初期のテキストである帛書『老子』が、天瑞篇に見える黃帝言をすでに取り込んでいたとする谷中氏の說（一六一頁）には、再考の餘地が生まれるであろう。成立について、樣々に見解の分かれる文獻であるからこそ、著者の立場をより明確に示した上で、文獻相互の關係を論ずる必要があったのではないか。

以上、評者の關心の赴くままに本書を論じてきたが、評者の指摘したいくつかの問題點を考慮しても、本書は極めて重要な價値を持つものと考えられる。郭店楚簡『老子』に「何が書かれていないか」を起點に、『老子』テキストのその後の樣々な變容をダイナミックに論じた本書の新たな視點は、まさに「無」から「有」を生み出す道家的「道」の體現であるかのように思われる。古代中國思想研究者のみならず、道家道教に關心を持つ讀者にとっても有益な一書であると言えるだろう。

なお、本書については、すでに複數の書評が發表されている。讀者の便をはかるため、次にその書誌情報を掲げる。併せて參照されたい。竹田健二「谷中信一著『『老子』經典化過程の研究』」（『中國出土資料研究』二〇號、二〇一六）二一一～二二一頁、有馬卓也「進化する『老子』」（『東方』四二七號、二〇一六）三四～三七頁、湯淺邦弘「學界展望　哲學」（『日本中國學會報』六八集、二〇一六）三三三頁。

（A5判、三三〇頁、二〇一五年一二月、汲古書院、九〇〇〇圓（稅別））